

村に吹く風

活力を生む学校だよりと国際交流

田中順一

目次

はじめに …… 7

(1) 平成の市町村合併の進む中で …… 10

① 突然の異動 …… 10

② 市町村合併の流れに乗らず、自立の村へ …… 11

③ 単独の村として …… 12

(2) 存在感のある学校づくりを目指して——自ら情報を求め、情報を発信する—— …… 14

① 子どもたちの力はすごい …… 15

② 第三十九回博報賞受賞 …… 16

③ 国際理解・国際交流 …… 18

(3) 地域の特色を生かした学校づくり——村で子どもを育てる—— …… 18

〈第一部〉学校・家庭・地域を結ぶ学校だより …… 21

1 学校の果たす役割 …… 22

(1) 教育の場として …… 22

(2) 地域の文化的要として …… 25

2 学校・家庭・地域を結ぶもの

(1) 学校だより「とりどりの花」とおして——家庭と地域に話題を—— …… 27

① 校長として続けた二つのこと …… 27

② 情報を伝える形 …… 28

- ③ なぜ学校だよりか? …… 30
- (2) 子どもたちの姿を伝える——子どもの元気は村の活力—— …… 33
- ① ほめて育てて、意欲を引き出す …… 34
- ② 互いの活躍を認め合える人間関係づくり …… 34
- ③ 村の人々の温かな励ましの中で育つ …… 34
- ④ 教職員はのびのび仕事、校長は広報マン …… 35
- (3) 学校の「今」を伝える——「見える学校」に—— …… 35
- (4) 共に教育を考える——小さな学校の大きいなる挑戦—— …… 36
- 3 学校だよりのコンセプトと話題 …… 38**
- (1) 学校だよりのコンセプト …… 38
- (2) 話題収集と整理 …… 40
- 4 「とりどりの花」発行の歩み …… 42**
- (1) 「とりどりの花」保護者・生徒版 …… 42
- (2) 「とりどりの花」地域版 …… 46
- 5 学校だよりの作り方のヒント …… 47**
- (1) まずはじめに …… 47
- (2) 紙面の構成 …… 50
- (3) トップ(メイン)記事と囲み記事 …… 50
- (4) 連載記事 …… 52
- 6 学校だよりから生まれた連載記事 …… 55**
- (1) 「学ぶこと育つこと」①～⑭ …… 55

	(2)	「生きること出会うこと」①～⑭	79
	(3)	「学ぶこと育つこと」第2シリーズ①～⑲	95
	(4)	「〇月生まれの君に贈る詩と詞」——「誕生日おめでとう」	125
7		学校だより「とりの花」の実際	157
	(1)	保護者・生徒版	159
	(2)	地域版	179
〈第二部〉小さな村から世界が見える …… 199			
1		小さな村の大きな挑戦	201
	(1)	小さくても対等に——悲しさと誇りと	201
	(2)	可能性を開く——子どもたちの可能性、教育の可能性、村の可能性——	202
	(3)	縁が取り持つ国際交流	205
2		アメリカから中学生が来るぞ！	208
	(1)	ホストファミリーは集まるかな？	210
	(2)	太平洋に友情の橋を架けよう！	221
3		海を渡った10人の子どもたち	233
	(1)	フラッグスタッフへ行くぞ！	235
	①	友情の橋を渡ってフラッグスタッフへ	241
	②	フラッグスタッフでの目覚め	245

	③	ホストファミリーとの出会い	……	247
	(2)	みんなどうしているかな？	……	249
	(3)	なに！飛行機が飛ばない？どうなってるんだ、アメリカは？	……	262
	4	村にオーケストラがやってくる	……	273
	(1)	ドイツから室内楽団一行が来るぞ！	……	273
	(2)	伸び伸び、子どもたちの意欲的行動！	……	284
	(3)	村のホールは満員御礼！	……	289
	5	国際交流の火は消えない	……	295
	(1)	山添国際交流を進める会	……	295
	(2)	定着する国際交流へ	……	296
おわりに	……			298
参考図書	……			301

はじめに

明治維新による西洋教育の導入、戦後の新たな教育制度の導入に続く第三の教育改革と言うべき今日の行財政改革に伴う教育界の変革は、教育現場の抱える教育課題を取り上げつつ有無を言わさぬ形で進められている。

それは学力の問題であり、指導力の問題であり、いじめや不登校、校内暴力などの生きる力や社会規範、安全に関わる問題であり、食育などの健康に関する問題であり、国際化、情報化に伴うコミュニケーション力や英語力、情報公開、個人情報保護に関する問題など、様々な教育課題にとどまらず、学校評議員制や内部及び外部の学校評価など学校教育の諸分野から学校運営、学校経営にまで及んでいる。学校の存在の形、学校の果たすべき役割を根本から問い直すところに至つていと言える。

もちろん今後の日本の子どもたちの方向を大きく左右する根本的なとも言うべき今日の改革は、教育現場を中心とした大胆な変革、教育への効果と責任、説明責任が求められるのは当然としても、今日の教育課題の大半は教育現場だけの努力で解決できるほど単純なものではなく、社会や家庭・地域の支援・協力や保護育成責任を問うべき点が多く見られる。しかし、その点はなおざりにされたままただ教育界への要望だけが先走りしている。

確かに戦後教育の中で、学校が日々の営みに汲汲と、または安閑とし、自ら改革する力を十分鍛え蓄えてこなかったのではないかと思われる点もある。様々な大きな課題を日常的に抱え、多くの教職員がその対応と解決に心身をすり減らしていても、国際的に高い学力が認められ、国が成長を続けている間は、それなりに乗り越えてくることができた。しかし、バブル崩壊とともに、学力面においても下降傾向が大きく問題視

され、社会全体が自信を喪失していく中で、行財政改革が展開され、成果・効率主義が広く社会に浸透しはじめると、「ゆとり教育」や週五日制が諸悪の根源のように取り沙汰され始めた。問題は、「ゆとり教育」や週五日制そのものであるより、子どもたちの知・徳・体のバランスのとれた成長を促進する教育がなされているかどうかではないかと思う。子どもたちの望ましい成長を促すような社会や政治であり、周囲にどれだけの子どもたちが憧れる魅力ある大人（人間）の姿があるかということではなかるうか。

子どものおもちや箱のように、子どもに関することはすべて学校教育という収納ボックスに未整理のまま投げ入れてきた日本の文教政策や社会の要望が、今日の教育の行き詰まりを生み出したとも言える。しかし、そのことに気付いている人はどれだけあるだろうか。戦後教育の成果と課題を一面的でなく、本当に今後の教育に生かすとすれば、より冷静で客観的な視点が求められる。そのためには、まず今日の教育現場を、教職員の実際の姿を知ってもらうことが何より大切だと思う。知ってもらうことによって、学校の果たすべき役割、学校のあるべき姿がより鮮明になってくることは間違いない。学力問題に歪曲しないで、人間を育成する場としての学校の存在が改めて認識されるに違いないし、学力の前提ともなる関心・意欲の衰退や目標目的、夢や希望の希薄さ、世界的視野の狭小さが極めて由々しき事態であることが明確になってこよう。

何はともあれ、時代や社会の変遷につれ、教育制度が改革され、教育内容が手直しされるのは極めて当然なことであり、常に手直しをし続けていかなければ、次代を担う子どもたちに、新たな時代、社会の課題を解決し、より望ましい社会を創造する力を身に付けさせることは不可能である。

ただ日本人は変革に弱い。今の状態を好ましいものと受け止めれば、その状態に安住し、変化を望もうとしない傾向が強いように思う。予想外のこと勃発したときに、そのことの責任をどこかに求めようとするが、予想外のこと起こりうることを想定することや、再発に備えた制度的な対応は後回しにされる。予想

外の事変は特殊な出来事と考え、そのことへの対処にあまり必要を感じない傾向がある。当初対策的に声高に掲げられた改革もいつのまにやらどこかへ消え去ってしまうという事例はあまりにも多い。

もう一つ懸念されることとして、どんなにすぐれた教育制度が施行されようと、教育現場が変革の意義や必要性・重要性、変革の方向、内容、方法を十分認識しなければ、それは絵に描いた餅と同じことになるということがある。教育現場を預かる教職員が変革の意欲を持てるような教育改革こそが肝要であるが、現在の教育改革は、財政的にも人的にもあまり投資をしないで、現場の努力を中心とした改革に終始している面が多く見られる。国家百年の計にはほど遠い、小手先の改革に過ぎない。心身共に疲弊している教職員は増えるばかりであり、魅力ある教育現場をつくらなければ、次代の教育を担う若い教職員は生まれてこない。また、改革といっても全国画一的なものもあるうが、地域の実情に応じて何から手を付けるべきかは異なつてこようし、改革のスピードも当然諸事情に左右されるはずである。

そんな学校教育の場で、学校経営・運営に直接携わる校長・副校長・教頭などの管理職は極めて重要な役割を求められている。特に校長はそのリーダーシップを発揮し、教職員の指導力、組織力を高め、ひいては学校の教育力を向上させる責務を負っている。ただ教育委員会の下請けでなく（求められる文書やメールによる報告や招集・呼び出しはあまりにも多く、それは教育現場を忙しくさせ、教職員の労力と時間を削ぐことになっていく。教育委員会も学校への支援体制や事務処理等に自己変革が必要である。何と言っても教育に必要なイマジネーションが不足していると言える）、眼の前の子どもたちの姿や教職員構成から学校の課題を的確に把握・設定し、さらには地域の特色や教育力を反映させた学校経営が求められている。何が課題で、何を、いつまでに、どう変革することが必要なのか、まず校長が把握し、教職員がそれを共通理解すれば、改革の力とスピードは大きく向上する。よりよい社会を創造する人間の育成が教育の責務の一つであるとす

れば、常に自己点検を進め、よりよい教育を創造しようとする姿勢と意欲が教職員には不可欠である。

私は、幸いにも最後の五年間を同一校に勤務することができた。その五年間は、ある意味では厳しく、またある意味では実にやりがいのある楽しい期間であった。

(1) 平成の市町村合併の進む中で

① 突如の異動

教諭時代に九年間を過ごし、多くのことを学んだ奈良市内の公立中学校に校長として再び着任した私はその年、第三十二回全日本中学校国語教育研究協議会奈良大会を県国語教育研究会の仲間と共に成功裡に終え、二年目の学校経営の構想を練っていたが、まさか一年で転勤するとは考えてもいなかった。教職員や生徒、PTAの皆さんもいぶかしがり、旧知の仲間の中では、何か不始末をしかしたのかという話を持ち上がっていたと言う。ともかく私は異動することになったが、市教育委員会の尽力のお陰でいい人材を迎え、次年度の校内人事を無事組むことができたことに安堵し、二、三年でまた戻ることもあるかと任地に向かった。

私の新しい赴任先は奈良県の北東端、三重県との県境にある山村の中学校である。小学校は三校あるが、中学校は村内に一校である。この山添村は私の生まれ故郷であり、三十一年前に私を教師として初めて迎えてくれた土地でもあった。当時は三校あった中学校が、その後統合によって一校になっていたのである。

その山添中学校では、前年に文部科学省・県教育委員会の国語力向上モデル事業研究指定校となり、村教育長は前任の校長の退職によって後任の校長を奈良市教委と交渉していたらしい。どうやら研究の仕上げをして、少しは郷里に恩返しをするようにということであったらしい。私を喜んで迎えてくれた教育長はその年の秋退職され、新しい教育長とその後四年間付き合うことになるのである。

② 市町村合併の流れに乗らず、自立の村へ

数年前から市町村合併が大きな話題となり、村は奈良市との合併に賛成、反対で大きく揺れていた。早くから奈良市と合併を決めていた、梅林で有名な北隣の添上郡月ヶ瀬村に続き、山添村と共に山辺郡を構成していた南の都祁村も合併を決定した。

大和高原と呼ばれるこの一帯で何かと共通点の多い三村は、行政面においても互いに協力し合い、三村を奈良盆地から伊賀盆地へと貫いて結ぶ名阪国道によって日常的に交流してきた。

三村の各村教育委員会も、定期的に郡教育長会議などを開催してきたし、この三村に県教育委員会から山辺・添上郡地区担当指導主事が配置され、毎年、三村の教育委員会に教育事務所を置き換えながら、週一日ずつ他の二つの村の教育委員会事務局に指示伝達していた。

この二郡三村の各村立学校が集まって子どもたちの体育大会などの行事や教職員の研究会などが定期的開催され、交流してきたのであるが、平成の市町村合併で、各村の目指すところが異なったのである。その結果、山添村を挟む形の月ヶ瀬村と都祁村は奈良市となり、山添村は自立を目指し、村として残ったのである。

私の赴任した一年目（2004年）は二郡三村としての最後の年であり、山辺・添上郡校長会も、子どもたちの様々な郡大会や交流も有終の美を飾りながら、だれもが寂しさと次年度への不安を隠せなかった。

この年、これまでの三村としての締めくくりや整理をしながら、私は指定研究の仕上げや次年度からの村校長会や村教育研究会などの新たな形作りを追われることになった。

一方、地区担当指導主事を山添村単独で抱えることは財政的に不可能であり、村教育委員会は、週一日だけの派遣を県教育委員会に要請していた。だがその決着を見ないまま教育長が交代することになり三月末、行政面で協力関係にあった天理市担当指導主事を週一日迎えることを、新教育長は了承したのである。

村教育委員会事務局も異動が激しく、私の在任五年間で教育長三名、事務局長が四名、次から次へと入れ替わり、前任者に了解を取り付けたことが引き継がれないもどかしさを感じることも多かった。

③ 単独の村として

翌年、人口約四五〇〇名の山添村は一郡一村を名乗って新たにスタートした。

私が赴任する前年まではまだ恵まれていた教育予算は、予想される交付税削減を見通した村予算の試算を基に、五、六年間のマイナスシーリングが避けられないとして、毎年減額され続けることになる。役場の職員の削減や給料の減額なども実施され、聖域はあり得なかった。

赴任した年は、学校図書費はわずか五万円であった。通常学級各学年一クラスの三学級、特別支援学級が二学級、全校生一〇八名の規模とは言え、あまりにも少額であり、新規購入は極めて貧弱なものであった。

かつての三中学校の蔵書で一定の冊数はあるというものの、基準には遠く及ばなかった。指定研究の一環として全校読書スピーチに取り組んでいたこともあり、図書充実のための文科省からの補助金交付等の資料を揃え、何とか図書費を二〇万円にしてくれるよう強く訴え続けたが、一〇万円を確保するのに三年を要した。

五路線もあるスクールバス の運営だけでも、小さな村にとっては大きな負担である。ある程度見通しのつくところまでは、雨漏りなどの緊急修理以外の予算は減額が続くことを我慢しなければならないと腹をくくる。ただ村内を名阪国道が走っているとはいっても、唯一の公共交通機関である奈良交通路線バスは極めて便数が少なく（一日三便、途中乗り継ぎ）、中学校では部活動の公式試合など対外試合に参加するのに役に立たない。そのためバスの借上げ費が予算として認められているが、私の赴任した年から減額が始まり、回数の見直しなどを迫られた。減額分を穴埋めするために、役場のマイクロバスをお願いするなど、役場職員や本校職員には随分助けられた。

二〇〇六年には、地区担当指導主事が完全に引き上げられた。村教育委員会には、学校教育・教育現場に通じている人は一人もいず、三年目の教育長は人はいいのだが、相変わらず分らないの一点張りである。学校が文科省・県教委の指針や情報を率先して把握し、自ら必要な改革を進めていくより他に方法はない。県の校長会などでは、郡市代表の集まる定例校長会が毎月開催される。二十一校の中学校を抱える奈良市などと同等に、山辺郡として出席することになるのである。このような形は山添中学校だけであった。全国的にも極めて珍しいケースであろうと思う。幸いにも校長会事務局や他郡市の校長は同情しているいろいろ配慮してくれ、随分助けられることも多かった。

他郡市では着々と学校評価や学校評議員制の導入が進められていたが、教育界の動向や教育改革の方向に他力本願的な村教育長、教育委員会事務局からは、教育改革の話は一度も聞かされることはなかった。かえってそれがよかったのかもしれない。県下各中学校での取組を聞きながら、村教育委員会の眼を気にせず、本校独自の取組を進めることになった。ただ予算はない。事務費の見直しや様々な教育助成金、教育論文報奨金など、常に数年先を見通しながら経費もこちらで工面しなければならなかったが、苦勞と思つたことはない。逆に教職員といろいろアイデアを出し合い、取り組んでいく楽しさがあった。

そんな中で、表現力向上の取組や国際理解・国際交流、二十周年行事、学校評価、学校評議員制の実施、学校支援地域本部事業、第三十九回博報賞受賞など多くの成果を得ることができ、着任時には予想もしなかった充実した五年間となった。

そしてこの間、村内に三校あった小学校の統廃合が進められた。廃校になる校区の人々の学校への思いは事務的な話し合いではなかなか汲み上げることは難しい。そんな中で二〇〇六年、三校が二校になり、二〇〇八年、いよいよ二校が一校になった。一村として残っていくためにはやむを得ない措置であったかとも思

われるが、次々と寂しい話ばかりで、村全体が活気に乏しくなっていくように感じられた。

(2) 存在感のある学校づくりを目指して——自ら情報を求め、情報を発信する——

二〇〇四年度 一〇八名、二〇〇五年度 一〇五名、二〇〇六年度 九四名、二〇〇七年度 九八名、

二〇〇八年度 九一名

私が在職中の全校生の人数の推移である。過疎化・少子化の中で生徒数の減少は学校の活気だけでなく、諸活動において支障が生じてくる。生徒会委員会の統合や清掃担当場所や清掃方法の見直しなどを迫られる。生徒の中にはいくつもの仕事を掛け持ちで引き受ける者もいる。幸いに部活動は何とか維持することができた。部活動は陸上競技部（男子のみ）、ソフトテニス部（男子のみ）、男子卓球部、女子卓球部、バレーボール部（女子のみ）、吹奏楽部（男女）の六つで、安全確保のための集団下校、スクールバスの利用、体力向上、各部の維持などの点から全員参加としていた。

二〇〇四年度、三村での諸行事は最後であることを折に触れ教職員、全校生に話し、次年度からの学校生活、学校運営への心の準備を進めた。同時に、たった一つの中学校が郡を代表する形になるけれども、決して大きな郡市に負けない学校にしていこうと話し続けた。

「国語力向上」の指定研究は、「話し言葉を磨く指導の工夫」とテーマを設定し、総合的な学習の時間を中心として様々な学習の場で推進されていたが、「話す力の向上」の前提として、他校でも実施されている全校「あいさつ」運動に力を入れていた。まずあいさつで日本一の学校になろうと、「すてきな笑顔を添えて、元気で気持ちのよいあいさつ」を目指して、生徒会でも重点的に取り組んでいった。

さらに、学校のすばらしさは人数の多さではなく、全員で心を一つにして取り組むその質が大切であり、「一流の中学生であれ」とか、「よく働く人であれ」（本当に本校の生徒はどんな活動においても決して弱音

を吐いたり、嫌がったりせず、よく活動する」と諸活動に意欲的に取り組むことを機会あることに話したものである。そして、小さいながらも、「山添中学校ここにあり」とその存在を全国に示そう、「存在感のある学校」にしようと、少々の不安を抱きながらも二〇〇五年度のスタートを切ったのであった。

中学校が元気に諸活動に取り組んでいる、中学生たちが元気な姿を見せ続けることが村に話題と活気を生み出す、人々を元気にすると考え、単独の学校であることをメリットとして、受け身ではなく、柔軟な発想と創意工夫、意欲的で心一つに取り組むチームワークを発揮して、学校に一つのリズムを作り出していったのである。大胆に思えるものもあつたが、それは子どもたちに大きな変化と意欲、自信を生むことにつながつたと考えている。

① 子どもたちの力はすごい

あいさつ運動は全校に浸透し、来校者から褒められる状態となつた。そのことを来校者が校長室で話される。私はあいさつは当然でしょう、他校でもやっているでしょうと返すと、いやこの生徒さんのあいさつは違うんです、とても気持ちがいいんです、こちらまで嬉しくなるんですと言われる。そのことをまた、生徒に伝える。褒めるのであるが、ただ褒めるのではなく、新たな課題を一つだけ付け加えてである。常にレベルアップを図ることを心がけるのである。それは一歩と言わず、半歩でもいい。同じ所に止まらないで常に目標を持って前進し続けることを促すのである。あいさつだけでなく、学習面においても、諸活動においても同じことである。そのためには、私たち教職員も常にこれでよしとせず、改善を図らねばならないことは言うまでもない。中学時代の子どもの成長は空恐ろしく大きい。少しも立ち止まらないし、常に新しいものに関心を向ける。基本的な部分は押さえながらも、去年とはちよつと違うぞというところをつくることがミソだ。子どもたちが自分の能力を高め可能性を広げるために、私たちは子どもたちが挑戦できる機会